

「たとえを用いて語る」と小標題が掲げられます。

マタイは冒頭の34節で主語に「イエス」を用います。これは13章においては1節以来のことです。そして34節で「群衆」を用いています。これも2節以来のことです。つまり、ここでは再度イエスの語る対象は徹頭徹尾、群衆に対してであったということの再確認作業が行われてゆくのです。そういう意味でこの34節は1-2節と対応して、13章前半のたとえ話の総括となっているのです。内容はマルコ4:33-34をベースにして、より分かり易く、そしてマタイの文脈に沿うように改められています。

マルコでは、群衆とはある程度イエスのたとえを理解した対象として語られます。そして弟子たちは別個に説明して教えたということになっています。しかし、マタイでは、群衆とはまったく理解出来ない存在(12-13)であると語るのです。それに対して弟子たちは別個に説明して教えなくても理解出来る(11)として、彼らへの言及は削除しています。この大幅な変更によって、マルコの語る「群衆」とは教会外の一般の人々を指し、他方、マタイの語る「群衆」とは、彼が所属した教会内の不適格者を指していることが分かります。そういう者たちにとって「イエスのたとえ」は結局「なぞ」(13)でしかないと語るのです。

35節は詩編78:2の引用です。これが「預言者」(35)からの引用と理解されたのは、詩編作者のアサフという人物が歴代誌下29:30で、預言者の一人と数えられているアサフと同一人物と考えられたためであろうと思われます。

また当時、詩編は神の靈感によって書かれたと考えられていました。さらに、イエスの時代には靈感には預言能力があると考えられてこともマタイは上手に利用していることが分かります。引用文の1行目はギリシア語70人訳聖書をそ

のまま用いられていますが、2行目はマタイのオリジナル翻訳です。ここで彼は「なぞ」というヘブル語原文を「隠されていたこと」と変更しています。「なぞ」は文字通り最後まで謎なのですが、マタイが使う「隠されていたこと」とは、やがて「明るみに出る」ことを予見するのです。隠されたことは公になって誰もがその恩恵に与ることが出来るというのがマタイの主張なのです。

マタイの詩編引用の意図は4つあります。第一は、イエスの教えとはそれまで隠されてきた神の秘密であること。第二は、その秘密を伝えるイエスはまさにメシアであること。第三は、たとえて語るイエスの教え方は旧約によって正統なものであることの証明。第四は、この教えは「隠されていたこと」であるから、いよいよ明るみに出ることの強調なのです

マタイの時代は抑圧と迫害の時代でした。人々はインスタントな解放を求めたのは無理からぬことだったと思います。しかし、マタイは生きるということが本来、束縛に耐えることだと提案するのです。わたしたちは束縛のない自由な状態を願って止みませんし、束縛からの解放こそが自由だと考えます。それを神になぞらえて永遠化しようとするのは妄執に過ぎないし、生きることへのいくじのなさだとマタイは語るのです。わたしたちが願望とすべきは束縛のない状態ではなくて、むしろ束縛に耐え抜くいさぎよさではなかったでしょうか。それが明るみに出るイエスの教えという自由なのです。